



Mr. ハンス
のショート
ショート作品



Mr. ハンス

怒れる魂

宇宙を構成する謎の物質に“ダークエネルギー”と云われるものがある。

この話しに登場する人物は、知らず知らずの内に、この未知の力である“ダークエネルギー”を引き寄せ、大きな事件を引き起こしていく。

果たして、この得体のしれない恐ろしいエネルギーの正体とは、、、。

時は現代。3流の某大学を卒業し、正規の職に就けないまま、30歳近くになるまで都内のコンビニやファーストフード店でバイト生活を続けているアキラは、和歌山の田舎にいる両親や兄弟とも疎遠な日々を送っており、ただ一つの楽しみ、趣味が、携帯ゲームと云う、傍目にもパツとしない青年であった。無論、独身である。

口数は少なく、バイト先での人間関係も希薄で、本人としては、人と関わらない生活の方が気分的に楽、という思いだけであったが、周りからは、何を考えているのか分からない、ちょっと暗い奴、というのが、大筋の評価であった。

そんなある日、アキラの勤務先であるコンビニで、ちょっとした事件が起きた。

アキラがいつものように、一通りの仕事を済ませ、次の人にレジを引き継ぐ時、レジのお金が合わなかったのである。ちょうど千円が、足りない状況だった。

こういった事は、珍しい話ではなく、スタッフの釣り銭の間違い等で、よくある事ではあったが、引き継ぐスタッフの一言が、アキラの心をカチンと傷つけた。

「お前、こっそりポケットに入れたんじゃないだろうな。」

先輩は、ちょっとした冗談のつもりもあったのかもしれないが、その言葉を真に受けたアキラは、大いに自尊心を傷つけられた。

その場は、ムツとするだけで、間違えてすみませんでしたと、簡単に謝り、自分はそんな人間じゃない、と怒鳴りたい気持ちを抑え、家路についたが、家につくまで、時間がたつごとに、何とも収めようのない怒りに、身をもて余すアキラであった。

それまでも、これに似たやりとりを、どんな職場でも経験をした。一度や二度ではない。その都度、悲しい気持ちになったり、やるせない思いを抱いたが、最近は、

どうしようもなく強い怒りが、自分の心の大きな部分を占めるようになってきた。

アキラが自宅の安アパートで悶々と怒りに震えているその時、少し開いた窓の隙間から、無色透明の不思議な想念エネルギーが入りこんできていたのを、その時のアキラは、まったく気がついていなかった。

どうやら、その想念エネルギーは、アキラの心の内に湧きでる怒りの気持ちに引きつけられて、流れてきたようなのだが、その事によって、これから起こる悲惨な出来事を引き起こしてしまう事になるうとは、その時のアキラには、予測しようもない事だった。

いったい、この想念エネルギーの正体とは、、、。

この想念エネルギーは、人には見えないし、しゃべったりもしないが、彼らのやり取りを擬人化する事によって、彼ら、想念エネルギーの正体に迫ってみたいと思う。

「おい、今日もあちこちで、怒りの火がチロチロと燃えているなあ。」

「ああ、俺たちにとっては、ごちそうが尽きないし、いい世の中だ。」

「まったく人間と云うのは、何百年、何千年たっても、怒りの感情というのは、変わらないし、最近はその数も、めっきり増えているみたいだぜ。」

「そうだな。怒りの種火が増えているおかげで、俺たちも大忙しになってきた。」

「おや、あそこ（アキラのアパート）でも、怒りの火が強くなっているぞ。」

「よお〜し。それじゃあ、仕事に取り掛かるか。」

そう、先ほどの場面である。

ちょうど、アキラの安アパート付近を漂っていた想念エネルギーたちが、舌なめずりをしながら、少しずつ、少しずつ、アキラの心の内に取りつこうとしていた。

その日以来、アキラの心境が変化し、その変化は、周りの人たちに気づかれることなく、大きく、大きく、怒りの感情が、増幅され続けていった。

“何で俺だけ、疑われないといけないんだ。”

“何で俺だけ、認めてもらえないんだ。”

“何で俺だけ、社会から疎外され続けるんだ。”

アキラのうっ屈した感情は、漠然とした世の中への不満を増殖させ、アキラの勤めている店舗、同僚、上司、すべてへの人たちへの敵対意識へと切り替わっていった。

そんなアキラの身边に、そっとよりそうように様子を伺う、気品のある一人の女性の存在があったのだが、その時のアキラは、そのことに、まったく気づいていなかった。

彼女は、憂いを帯びた瞳で、アキラの未来に、照準を合わせていた。

「彼らの思い通りにはさせない。」

そんなある日、アキラの感情が爆発し、想念エネルギー（憎悪の念）が最高潮に燃え上がる瞬間（とき）がやってきた。

先輩に嫌味を言われて以来、アキラは「うっ屈した気分」が晴れない毎日を過ごす中で、保身用の武器と自分を納得させながら、様々な種類のナイフ収集に、熱中するようになっていった。

そして、集めたナイフのいくつかを、毎日、その日の気分に応じ、こっそりとカバンに忍ばせ、勤務先に出勤するようになっていった。

ナイフを持っているというそれだけで、アキラは何となく強くなったような気がして、面倒くさい人間関係の煩わしささえも、そのナイフを思い浮かべる度に、吹き飛ばせるような（爽快な）気分がするのだった。

空想の中のアキラは、間違いなく、たった一人の味方、理想のヒーローだった。

そんなある日、いよいよ、その事件（惨劇）は起こった。いや、起ころうとした。

その日、アキラは夜間勤務で、朝方、弁当を買う人たちで混み始める前の6時頃、次の勤務スタッフとの引き継ぎをしていたその時、何気なく口にしたスタッフの一言が、アキラの怒れる魂に火をつけてしまった。

「この頃、賞味期限を過ぎて処分をする弁当の数が足りないって先輩がボヤいていたけど、お前、こっそり、持ち帰っているんじゃないか。」

アキラには、まったく身に覚えのない事だった。

ただ、その言葉が終わるや否や、彼は反論をするよりも先に、疑われたという悔しさだけを胸に、カバンの中に隠しているナイフを取りに戻り、取って返す中で、店内のスタッフ、その近くにいた客たちを、次々に切りつけていった。

特に、自分を疑ったスタッフには、その身体にまたがり、何度も何度も刺し続けた。

店内は、怒号と悲鳴に包まれ、間もなく、警察が駆けつけると、興奮しているアキラを取り押さえ、取り押さえられる中でアキラは、訳の分からない高揚感に包まれている自分を冷静に見つめている誰かの視線を感じていた。

その瞬間（とき）、まるでフラッシュバックをするかのように、時間が逆戻りする感覚に襲われたアキラが気づいた時、アキラは、ほんの少し前、スタッフから嫌味を言われている場面に、戻されていた。

怒りがこみ上げる前に、何が起こったのかわからず、嫌味を言われたスタッフの前で、とまどうアキラに向かい、店長がやさしく声をかけてきた。

「おい、アキラ。気にすんな。」

「さっさと、仕事を片付けろや。」

また、嫌味を言ったスタッフに向けても、やんわりと注意を促した。

「おまえたち、仲間なんだから、もっと信頼しようぜ。」

そんな店長の心のこもった叱責を受けて、その場は、何事もなく収まり、アキラは何だかキツネにつままれたような気分で、家路に着いた。

ただ、アキラの心の中には、店長の優しさに触れたことで、これまでとは違い、怒りの炎ではなく、自分を認めてくれた店長への感謝の気持ちが湧き上がっていた。

それと同時に、これまでの暗くやるせない鬱屈した気分が晴れ、ほんの少しだけ、明日への希望が満ちてくるような、そんな明るい気分につつまれていた。

あきらかに、アキラの人生が、好転した瞬間（とき）、出来事となった。

「ふう～。何とか、間に合ったわ。」

「もう少し遅れていたら、とんでもない事件になっていたはず。」

「本当に、よかった。」

実は、その女性が危険を察知し、アキラの想念に、数分先の未来をヴィジョンとして送り込み、その悔恨の念も併せ、アキラに逡巡の時を与えたことで、この危機を脱したのだった。

その謎の女性は、その背後にうごめくダークエネルギーの存在を熟知し、あきらかに、そのエネルギーとの対峙を意識し、アキラの危機回避と再生に力を尽くしていた。

さぞや、アキラに取り付いていたダークエネルギーは、悔しがっていることだろう。

この謎の女性の正体、そして、さらに続くダークエネルギーとの闘いのストーリーは、次の回に譲りたいが、今現在、あなたの心にも入り込もうとしている「ダークエネルギー」の甘い誘いには、くれぐれも注意をしていただきたい。

それは、永遠のごとく課せられた、乗り越えるべき人類共通の敵なのだから、、、。

一瞬の未来

とある高校の校庭の一角、大きな桜の木の下、就職や進学を控えた夏休みの補習の合間、仲の良い達也と勇の二人が、互いの進路や将来について、たわいもない会話をしていた。

「お前、親の後を継いで、パーマ屋をやるんじゃないのか。」

達也の問いかけに、勇はムツとした表情で答えた。

「俺は大学に行って、将来は、商社に入って世界を飛び回るんだ。」

「ふ〜ん、商社ねえ。俺には、わかんねえなあ。」

勇の若者らしい将来像に、イマイチ、共感を持ってない達也は、いったい自分の未来は、どう進んでいくのか、漠然とした不安だけが心を占めていた。

高校を出てすぐの就職に自信が持てない達也は、一応、勇と同様に、進学を目指してはいたが、将来、特になりたい職業や仕事への夢などはなく、ボンヤリとではあるが、それなりに成功できればいいなどと甘い考えにとらわれていた。

それもまた、青春の日の一コマであり、社会の厳しさが分かっていないなどと、達也の若さを責める気持ちになれないのは、普通の大人の感情ではないだろうか。

誰もが等しく、遠く若い日の感傷や不安をほろ苦く思い出し、いい大人になってから、あらためて、青春時代には予想も出来ない、その頃からすれば、遠い未来にいる、今現在の自分の人生の足跡を恥じるとともに、悔恨とあきらめの感情とが、とめどもなく湧いてくるものだ。

自分の人生は、こんなはずではなかった、と、。。

もっとあの日、あの時、あの頃、違う決断をしていたら、などと、。。

そんな大人の悔恨や複雑な思いを、青春ど真ん中の達也が経験する事になるうとは、勇との会話に興じていたこの日の達也には、知る由もなかった。

「さあ、そろそろ今日最後の補修が始まる時間だから、教室に戻ろうぜ。」

「そうだな。何だかうす暗くなってきたし、どうやら夕立ちがきそうだから、補修が終わったら、今日はお好み屋さんには寄らないで、まっすぐ帰った方がよさそうだな。」

勇が切りだしたのをきっかけに、二人が腰を上げ、大木に手をかけていた達也が返事をしたその時、ドドォ〜ンという大きな音ともに、斬り裂くような稲妻の光が、達也の目の前を駆け抜けていった。

その時、達也の魂は、遠い未来へと吹き飛ばされたのだが、同時に転倒し、すぐに起き上がった勇は、すぐそばで倒れたまま動かない達也の姿に驚き、慌てて、大声で叫びながら、倒れている達也を残し、助けを呼びに走っていった。

未来に吹き飛ばされた達也（の魂）は、その頃、不思議な感覚に襲われていた。

何となく、身体の感覚がなく、宙に浮いているような気分なのだ。

「俺、死んじゃったのかな。」

雷に打たれたという記憶（残像）は、魂として浮遊している達也の心象風景の中にも残っていたので、その時の達也が、そんな気持ちをもったとしても、不思議はない。

但し、達也は死んでいない。いや、身体は仮死状態だったのかもしれないが、少なくとも、魂が天に召されたわけではない。

単純に、身体と魂とが、雷をきっかけに、分離してしまっただけである。

しかも、分離し、魂が行き着いた先は、30数年後の未来、達也がもうすぐ、50歳を迎えようとする、ちょうど、その頃の時代であった。

浮遊する若い頃の達也の魂は、自分自身の年を取った魂と結びつき、その記憶や思いを共有する事が出来た。

但し、肉体に閉じ込められた未来の達也には、自分の若い頃の魂が近くで浮遊しているなどとは、思いもよらない事であった。

未来の達也は、苦悩の表情に満ちていた。

場所は、高尾山のふもとの人通りが少ないスギ林の中、若干、拓けている窪地にある大きな桜の木の下。

達也の両手には、太いロープがしっかりと握られていた。

「おいおい、まさか、未来の俺は、今、自殺をしようとしているのか。」

一瞬で状況を理解した若い達也の魂は、その場所に行き着くまでの達也自身の人生、未来の魂の記憶を、走馬灯のように振り返っていた。

からくも第2希望の大学に合格した達也は、大きな喜びに心を躍らせていた。

大学生活は、達也の考えていた以上に、青春を謳歌する日々となった。

友だちとキャンプに行ったり、酒を飲んでくだを巻いたり、初めて女性とつき合ったり、失恋したり、必死で落第すれすれの単位取得に苦労したり、音楽やスポーツに熱中したり、ドライブを楽しんだり、徹マンやパチンコに誘い合ったり、退屈な授業中に居眠りをしたり、などなど。

振り返ると、もっと他に、将来に役立つ経験や知識の習得に力を尽くすべきだったと反省する気持ちもあったが、概ね、満足できる青春時代であった。

「けっこう青春してるじゃん。大学に進学して正解だったんだな。」

若い達也の魂は、青春ど真ん中の楽しい日々に、さらに思いを馳せようとしていたが、すぐに場面は、卒業後の社会人時代、入社間もない初めての職場へと、忙しく切りかわっていった。

達也は、卒業後、中堅の食品メーカーに就職し、得意先スーパーに、自社の商品を営業して回る仕事に就いていた。

まだまだ、社会人として間もない達也は、先輩や上司に怒られながらも、必死で営業の仕事に慣れようとしていた。

大学生時代の自由な気分から一転、毎日が忙しく、余裕のない日々であった。

それでも何とか、中堅の社員として、仕事の楽しさ、充実感がわかり始めたある日、それまでつき合っていた彼女との関係に悩んでいた達也は、まだまだ、自分には結婚は早い、という結論を出し、彼女との別れを意識し始めていた。

そして、この時期、28歳になろうとしていた頃、時代の花形としてもはやされていた一流証券会社への転職をモノにし、彼女と正式に別れ、達也はますます、仕事にのめり込んでいった。

この後の数年間は、達也の人生の中でも、一番、輝いていた時代かもしれない。

仕事は順調で、私生活も、女性との関係などを含め、実に華やかであった。

いずれ、しっかり家庭を持って、落ちつこうという考えは、達也の中にもあったのだが、当時は、まだまだ若い気分、熱気の方が勝り、貪欲に、一人身を謳歌していた。

「何だか、危なっかしいなあ。」

その後のバブル崩壊を知らない若い達也の魂から見ても、この頃の達也は、とても危なっかしく、先々の生活の崩壊を暗示させるようだった。

もし、あの時、彼女と結婚をしていたら、。。
もし、あの時、転職をしないで、頑張っていたら、。。

未来の達也が潜在意識の中に眠らせている一抹の悔恨を、この時の若い魂は、しっかりと見抜いていたのかもしれない。

場面は、男所帯の汚いアパートの一室。

電気代やガス代、水道代などの請求書、家賃の催促書に目を落とし、深くため息をついている未来の達也の姿があった。

「えっ、あんなに順調だった俺の人生が、いったいどうなってるんだ。」

貧乏くさい中年男（未来の達也）の姿に、呆然とする若い達也の魂だった。

バブル崩壊後、達也の勤めていた証券会社は倒産し、いくつかの会社を転々としていく中で、未来の達也の生活は荒れ続け、50代が迫ってきたこの頃においては、不定期なアルバイトさえ続ける事が出来ず、その日の暮らしにも窮乏する、どん底の日々を送っていた。

「おいおい、しっかりしてくれよ。頼むよ。」

生きる気力を失くしつつある未来の自分の姿に、必死で声援を送り続ける若い達也の魂であったが、無論、その思いが、未来の自分に届くはずはない。

一気に場面は、最初に〔若い魂が〕迷い込んだ場所、杉の木立にある桜の木の下へと戻っていく。

夕暮れの肌寒いひととき、じっとたたずみ、過去を振り返り、黙って涙する未来の自分の姿に、不思議ではあるが、若い達也の魂は、人生の難しさ、悲哀さを、痛烈に感じ始めていた。

「やめろ、やめるんだ。人生はいつだってやり直せるんだ。」

未来の自分に向かって、若い達也の魂が絶叫をしたその時、突然、雷光が、目の前をよぎり、校庭の桜の木に倒れていた達也は、ハッと目を覚ました。

不思議な気分だった。

具体的な事は何も覚えていないが、何とはない将来への不安、これからの人生への根拠のない危機感だけは、余韻として残っているようだった。

慌てて駆けつけてくる勇や先生たちの姿から見て、気を失ってからの時間は、ほんの数分と思われるが、その時の達也は、長い長い旅を終えた冒険者のように、精も根も尽き果てていた。

「おい、大丈夫か。」

勇に抱き起こされた達也は、さびしい笑顔で、その声に応えた。

「ああ、勇か。俺もお前の様に、しっかりと将来の事を考えないとなあ。」

「ええ、何を言ってるんだ。おい、しっかりしろ、達也。」

ポォ～とした表情の達也に、不安を感じた勇は、到着した救急車の姿に、早く早くと、急いで手招きをし始めた。

人の人生や青春と云うものは、蛍の残像のように、いつまでも心の内に輝き続けるもののようだが、一瞬で駆け抜けられるほど、はかなく、もろいものでもあるようだ。

この先、未来の達也が、実際、どういう結末を迎えたのかについては、今後、若い達也の人生〔青春〕の足跡を、じっくりと、根気よく、追っていくしかなさそうである。

ロボットの涙

遠い遠い未来の話。

少年がひとり、小高い丘から、果てしなく広がる草原の景色をつまらなさそうに眺めていた。

いつの頃からか、少年はひとりぼっちになっていた。

記憶にある両親は、いつもやさしく、少年に寄り添っていたが、そのやさしさは、いずれ自分たちがいなくなり、少年が一人きりになることを知っていたからなのかもしれない。

少年には、なぜ、自分がひとりぼっちなのか、この世界にはなぜ、自分以外の人間がないのか、全然わからなかった。

でも、たった一つだけ、希望はあった。

少年の世話係として、両親が残してくれたロボットである。

顔、形、姿など、とても人間のようには美しくはないが、少年にとっては、大切な友達であり、あたたかい保護者でもある。

ロボットに、いろんな事を尋ねてみたことはあるが、その都度、

「何も知らない方がよいのです」

とって、多分、少年にはそう見えるのだが、そんな時には、一粒の涙をスゥーと流し、後は、黙り込んでしまうのである。

ただ、少年がある年齢に達すれば、どこからか少年の伴侶があらわれ、家族としての生活を取り戻せるでしょうと、もどかしい予言のような話をするのだった。

それから、いくつもの季節が通り過ぎ、少年が青年へと順調に成長を遂げた頃、草原の向こうから、一人の女性が歩み寄ってきた。

青年は、歓喜の表情で女性を迎え、そして、2人は子供を授かり、その子供が「ある年齢」に達した時、

1台のロボットと子供を残し、子供の両親である青年と女性は、いずこへともなく、消え去っていった。

ただ一人、真実を知っているロボットには、涙を見せることでしか、彼ら（人間）への回答は許されていないのである。

そして、その真実とは、、、。

ここは、星々の生態系を管理、観察している宇宙管制センター。

地球環境の汚染除去の為、多くの動植物をDNA保存しているのだが、人間など、冷凍保存が難しい種については、

彼ら（宇宙人）の采配で、わずかながらではあるが、安全な地域を確保した上で、適正な人数を保ち続けている。

汚染除去には、数万年の時が必要なのだが、その間は、彼らの保護プログラムの下で、人類は生かされているのである。

ただ、汚染除去後の放牧（解放）時期に、人間が再び、汚染の原因とならないように、増えすぎない対策を取る予定なのだが、、、。

ただ、あの少年が、そんな事情を知ったとしても、どうしようもないことだし、無駄な煩悶を繰り返すばかり。

ロボット（宇宙人）には、そんな人間の愚かさもわかっているのだろう。

彼（ロボット）に出来ることは、彼が精いっぱい人間らしさで、接してあげることだけ、、、。

そう、涙を流して、、、。

夕暮れの少女

その男は、一人黙々と、一本の道を歩き続けていた。

その男には、一つの目的があった。

この道の果てのどこかで、己の命を絶つ、という目的である。

なぜ、そんな悲劇的な目的を抱いてしまったのか。

理由は、愛する人たちを失ってしまったから、、、。

男には、愛する妻と可愛い二人の子供たちがいたのだが、忙しい男を残し、夏休みを利用した家族が、子供たちの大好きな実家（田舎）への帰省中に、交通事故に遭ってしまい、妻も子供たちも、亡くなってしまったのである。

人間の命とは、何とあっけないものだろう。

悲嘆にくれた男は、昔、妻と一緒に楽しく語り合った並木道のどこかで、自分自身も命を断とうと、そう決心をし、今、この懐かしい道を歩いている。

この道を、こんな目的で歩くことになろうとは、あの頃の自分には、思いもよらないことだった。

人の一生とは、計り知れないものだ。

自ら命を絶つなんて、などと思っていたあの頃の自分が、まさか、そんな道（あきらめの人生）を選ぶなんて、、、。

男には、もう何の希望もなく、心を占める虚ろさに、気力も萎え、うなだれるばかりであった。

さあ、この道のどこに、おれの末路があるのだろうか。

男の足は、一步一步、死神の祠へと近付いて行った。

その時、スゥ〜と冷たい風が吹き抜け、男の脳裏に妻の困ったような泣き顔が浮かんできた。

「お願い」

「待って」

妻は、はっきりと、そう男に語りかけているようだった。

男は、死の恐怖から、そんな幻を見ただけだと自分に言い聞かせ、なおも歩みを進めようとしたが、

今度は、子供たちが大きな声で、

「駄目だよ、パパ」

「負けないで」

と、声援を送ってきたのだ。

男は、困ってしまった。

せっかく、お前たちのそばに行こうとしているのに、なんで、駄目なんだ。

俺は、どうしたらいいんだ。

その時、立ち尽くしている男のそばに、そっと一人の少女が近づいてきて、無垢な笑顔で話しかけてきた。

「おじさん、泣いてるの」

「大人の人でも、泣くことがあるんだね」

「私も悲しい時は、ワンワン泣いちゃうの」

「でも、すぐ泣き疲れちゃうんだ」

「明日はきっと、いいことがあるよ」

「元気でね、おじさん」

少女は、そういうと、沈む夕暮れの街に消えていった。

ふっと気づくと、男の足はもう、並木道を通り抜けて、人々でにぎわう町の雑踏の中に溶け込んでいた。

男は、何となく気持ちが楽になり、もう少しだけ生きてみようと、空を見上げ、そんな気持ちを告げていた。

どうやら、男にとりついた死神は、もう少しのところで獲物を取り逃がしたようである。

正義ハンター〔序章〕

ハヤトは、追われていた。

時は、2120年。東京オリンピックから100年。日本は、いや世界は、100年と云う時間を経て、大きく様変わりしていた。

環境悪化による気候変動の激変、資源の枯渇による深刻な食糧問題、民族の自立や宗教観の違いに起因したテロや紛争の頻発、などなど。

人類が安心して住めるスペース（地域）は、年々、確実に狭められていった。

そこで、最終的に人類がたどり着いた答えが、国と云う単位を地球規模で統廃合し、全世界を連邦制に移行し、連邦政府に大きな権限を集中させることで、多少の問題？、はありながらも、人類が生き延びるという方法だった。

そして、この近未来、地球連邦の新政府が打ち出した政策は、完全正義の実現社会、というものであった。

簡単に云えば、中央や地方の法律、ルールを守れない人間は、地球連邦軍により、即座に駆逐される、というものである。

地球連邦の支配する地域（安全地帯）においては、究極の監視システムが敷かれ、軽い違反でも域外追放、それ以外のルール違反は、その場で射殺（殺処分）という、歴史上、最も厳しい管理体制が整えられていた。

この体制化においては、裁判などと云う、まだるっこしい存在はなく、連邦軍が配備している正義ハンターの判断一つで、即座に、処分が下されていた。

域外追放になった者は、その場で捕えられ、即日、域外行きの輸送船に乗せられる。抵抗したものは、その場で殺処分されても、誰も文句は言えない。

もちろん、正義ハンターが悪質なルール違反と判断すれば、捕まえる手間を省き、その場で殺処分に取り掛かる。

殺処分の方法は、現場の状況や正義ハンターの好みに応じ、様々な方法が

とられる。

この時、周りにいた人間が巻き添えを食ったとしても、正義ハンターが罪を負う事はなく、逆に、正義ハンターの仕事に非協力的な態度、行動であったと判断されれば、その人達も処分（域外追放or殺処分）の対象となった。

誰も、正義ハンターを止めることはできない。

悪いのは、ルールを破った方だから、、、。

ここに、理想的な完全正義の懲罰社会が実現した。

もちろん、この体制の背景には、多様な人種、文化を持つ人々を統括管理していく為の治安強化、噴出する反乱分子の徹底排除、増えすぎる人口の抑制、などがあり、多少の問題？、はありながらも、概ね（見かけ上の）平和が守られていた。

ただ、この体制下で発生している、多少の問題？、については、政権幹部たちも、その対策に苦慮していた。

さて、その〔多少の問題？〕とは、、、。

域外追放になった者や、殺処分を免れて、域外に逃亡した者たちが、地球連邦への抵抗ゲリラとなって、反旗を翻している問題である。

ただし、この近未来においては、国と云う単位はなくなり、ほぼ、地球上のすべての文明地域が、その支配下に置かれている事から、ゲリラに武器や資金を提供する組織や人（資本家）は、皆無と云ってもよいだろう。

また、連邦の域外地域は、生物にとっては劣悪な環境であり、生き延びることさえままならないのが、実状である。

ならば、何故、連邦政府が頭を抱えているかと云うと、一握りの天才たちがリーダーとなり、域外にも生存可能な安全スペースを少しずつ確保しており、早くその芽を摘まなければ、連邦政府の維持存続が危うくなるという予測が、スーパーコンピューターによって立てられているからである。

この域外にたてこもる抵抗ゲリラを連邦政府は、反乱分子と呼んでいるが、彼ら自身は、自分たちの事を「再生エスパー」と名付け、もう一度、平和で、安全で、自由な地球を取り戻そう、と域内の人たちに呼び掛けていた。

この物語は、地球の存亡をかけた「正義ハンター」と「再生エスパー」たちの長く、果てのない、闘いの物語でもある。

さて、話を元（冒頭）に戻そう。

いったいハヤトと云う青年は、何故、追われているのか。

事の起こりは、夕方の帰宅時、都心のとある駅、地下鉄のホームで電車を待っていた、いくつかの混み合う列の群れの中での出来事だった。

一つの列で、電車が入ってきたのと同時に、ある若い女性の前、最前列に立っていた老人が押し出され、入ってきた電車に轢かれてしまった。

一瞬の出来事だった。

ほとんど同時に、何人かの男性が、老人の後ろに立っていた若い女性を指さし、彼女が押したのを見た、と大声で叫び始めた。

現場は騒然となった。

犯人と目される女性は、顔面蒼白となり、ただ茫然と、その場に立ち尽くしていた。

そこに、反対側のホームにいた正義ハンターが、一目散に近づいていた。

彼女が正義ハンターに捕獲されるのは、確実と思われた。

その時、ハヤトは迷うことなく決断をし、素早く、ある行動に移った。

その行動とは、彼女を絶体絶命の窮地から救い出すことである。

何故、ハヤトが、そんな行動をとったのか。

その理由を知るには、この事件が起こった数時間前にさかのぼらなければいけない。

実は、ハヤトには、幼い頃から「超感覚」とも云うべき能力が備わっていた。

この能力に気付いた両親は、ハヤトに、絶対に、その能力の存在を他人に漏らしてはいけないと、何度となくハヤトに自戒を促がしていた。

ハヤトの両親は、再生エスパーの理念に共感を持ちつつも、連邦政府との戦いの渦中に巻き込まれることには恐れを抱いていた。

出来れば、平和に、おだやかに、家族の幸せを守りたい、と願っていたのだが、ある事件の巻き添えで、両親は共に殺処分の対象となり、孤児となったハヤトは、連邦政府の保護施設で育てられることになった。

正義ハンターの犠牲となった両親の思いを心に宿し、大人になったハヤトは、政府に割り振られた域外追放に関わる仕事をしていく中で、ある日、唐突に、再生エスパーの一人から発せられた思念をキャッチした。

その再生エスパーは、域内と域外の間地域で、正義ハンターに追われているようだった。

とっさに、その再生エスパーに向け、ハヤトは、安全な隠れ場所についての情報を無心で送った。

その後、どうやら、その再生エスパーは、危機を脱したらしく、ハヤトに感謝の念を送信してきた。

その後、その再生エスパーとハヤトの間で、思念交信を重ねるようになり、徐々に、より多くの情報、明確なヴィジョンを交信できるようになっていった。

その再生エスパーの名は「ミチル」と言い、どうやら女性のように、日本を中心としたアジアで活動している再生エスパーのようだった。

彼女との交流を通し、元々、連邦政府のやり方や、正義ハンターの存在に疑問を抱いていたハヤトが、本格的に再生エスパーの活動に身を投じようと

決意を固めていた頃、ミチルから、一つの情報が送られてきた。

先ほどの事件が起きる数時間前の出来事である。

秘密裏に、再生エスパーの活動に協力をしていた女性の身に、どうやら連邦政府が気づき、工作員を送り込んでいるようだから、彼女のガードを引き受けてくれないか、という依頼だった。

ミチルから送られてきた、その女性のデータを解析し、彼女の位置や姿を確認した直後に、先ほどの事件が発生したのである。

ミチルからデータを受け取って、数時間後のことだった。

事件を目の当たりにしたハヤトは、その事件がねつ造であり、

彼女を表面的には適正な措置として正義ハンターの手にゆだね、抹殺するための工作員の芝居であることを瞬時に見抜いた。

逡巡する時間の余裕はなかった。正義ハンターが、そこまで迫っていた。

ハヤトは、ミチルとの交信に用いたテレパシーの他にも、いくつかの超常能力を隠し持っていた。

そのいくつかは、まだ開発途上であり、ハヤト自身も、自分の能力の全体像については、全くと言っていい程、つかみきれていなかった。

それでも、火急の時と察したハヤトの潜在意識が助けてくれたのか、ハヤトの発した念力が功を奏し、一瞬、その近辺にいたすべての人の思念に強力な雷鳴のイメージが湧き上がり、失神者が続出した。

女性を捕獲しようとする麻酔銃を発射しようとしていた正義エスパーも、一瞬の間、たじろぎ、ほんの数秒間、意識を失ってしまった。

この間を利用し、ハヤトは女性の手を引き、一目散に駆け出した。

パニックに騒然となっている駅の人込みを利用し、何とか危機を脱したハヤトと女性は、とりあえず、街中のビルの隙間に身を隠した。

この当時、一人ひとりの行動は、公共の場にある監視カメラで監視されており、容疑者とみなされた場合は、99%の確率で、身元や隠れ場所を特定することができた。

ただし、再生エスパーや、その仲間たちの場合、この監視網を潜り抜ける何らかの能力や技術を用いているらしく、時として、この強力な監視網や正義ハンターの追跡をかいくぐられてしまうケースもあった。

ハヤトには、この監視網や正義ハンターからの追跡を逃れる自信はあったが、彼女を連れての場合、どこまで逃げおおせるかについては、一抹の不安があった。

ミチルとの交信を試みようとしても、いつも自由に交信できるとは限らなかった。

多分、いくつかの条件が重ならなければ、ミチルを捕まえることはできず、いつもは、域外に近い場所で、時間の許す限りの範囲で、彼女との交信、交流を続けていた。

今は、街の中心に位置しており、ミチルとの交信は難しい。

ハヤトは、決断を迫られていた。

すでに、彼が反乱分子であることは、連邦政府にも認知されているはずであり、彼女とともに、すべての正義ハンターに、二人の「殺処分」の指令が出ているはずである。

じっと考えにふけるハヤトに、窮地を救った女性が話しかけてきた。

「あなたは、もしかしたら、再生エスパーなの？」

「いや、そうじゃない。でも、もしかしたら、この先、そうなるのかもしれない。」

そう云ってハヤトは、落ち着いた口調で、ハヤトの生い立ちや、ミチルと知り合った経緯（いきさつ）について、くわしく説明をした。

「そう、そうなの。ごめんなさいね。あなたのご両親に申し訳ないわね。」

あなたを、こんな紛争に巻き込んでしまって、、、。」

彼女は、申し訳なさそうに顔を曇らせながら、彼女の生い立ちや、彼女が何故、再生エスパーの協力者になったのか、その経緯を話してくれた。

彼女はユウキという名前で、高級官僚の父母に厳しく育てられたお嬢さんであり、彼女の兄は、正義ハンターのリーダーとして、数多の事件で活躍し、メディアに取り上げられる、有名なヒーローだった。

そんな彼女が、なぜ、再生エスパーの協力者になったのか。

その理由は、この物語の進展に応じ、徐々に語っていこう。

いずれにしても、今は、再生エスパーの人たちと、どう合流するか。

その一点に集中し、この危機を切り抜けなければいけない。

ハヤトは、以前、何度も確かめた、域外に通じる裏ルートを使って、連邦政府や正義ハンターの追手から逃げようと決心した。

その間、ミチルへのSOSを発信し続ければ、きっと、再生エスパーの人たちが、助けに来てくれる。

今は、それを信じて、行動するしかない。

ハヤトは、彼女の手を引いて、いきおいよく走り出した。

彼と彼女の信じる未来へ向かって、、、。

コッカー探偵事務所に、一通の相談メールが届いた。

コッカー探偵事務所のホームページは、非常にシンプルな作りになっており、日本語と英語表記で、依頼人名は匿名可、依頼内容、報酬、連絡方法と、受付項目は、この4項目だけである。

不思議な事に、何のPRもしていないのに、世界中から相談のメールが多く届くのだが、ほとんどのメールには、「多忙につき相談不可」の返信を送り返している。

中には、多額の報酬を提示している案件もあるのだが、コッカー自身が興味を抱かない限りは、数多くのジャンクメールと同じ扱いである。

ただ、今回の相談メールは、珍しく日本の若い女性からのもので、その相談内容にも、何かしら興味を引かれるものがあったのか、熱心に読み込み、思案をするコッカーであった。

報酬提示額は、コッカーのレベルからすれば微々たるものであり、通常は引き受けられるレベルではないが、その依頼内容に、大いに心を動かされた。

相談の内容とは、要約すると、次のようなものであった。

依頼人（若い女子大生）の祖父が最近亡くなったのだが、その祖父が、自分が亡くなった時には、その女性（孫）に、ある事をしてほしいと頼んでいた。

ある事とは、とある公園の中にある一本の木の根っこに、12月10日の前日までに、人に見られないように気をつけて、自分（祖父）が亡くなったことを簡単に知らせたメモを隠しておいてほしい、というものであった。

その女性（孫）には、心当たりがあった。

祖父から生前、一度だけ、幼い頃、不思議な昔語りを聞いた記憶があった。

祖父がまだ若く、社会人になって間もない頃、ある地域の営業担当になり、

とある顧客の自宅に向かおうとしていたのだが、道に迷い、困っていた時、目の前にあった公園に白バイの警察官がいるのを見つけ、声をかけたそうである。

すると警察官は驚き、困ったような表情で、自分もこのあたりの住所には詳しくないが、お探しの番地だと、多分、あちらの方向でしょうから、その先で、また、どなたかに聞いてみてくださいと、親切に答えてくれたそうである。

祖父は感謝し、自分はこういうものと、その警察官に、自分の名刺を渡し、お礼を述べたそうである。

祖父としては、警察官に、自分は怪しいものではないと言いたかったのだろうが、その警察官は苦笑いをし、どうもありがとうございますと、その名刺を受取ったそうである。

祖父はその時、その警察官が若く、手元の地図に熱心に目を通していた姿から、この人も新米の白バイ隊員なのだろうと、勝手に親近感を抱き、あれこれと営業の苦労話をしたそうだが、時間を気にしながらも、付き合っ話をして聞いてくれたそうである。

しばらくすると、自分ももう、パトロールに戻らないといけない、貴方も頑張ってください、という言葉を残し、その警察官はその場を立ち去ったという。

祖父が名前を尋ねると、ササキと名乗り、まだ新人ですよと、笑って答えたそうである。

それから数日後、ある事件のモニタージュ写真を見て、祖父は驚いた。

そのモニタージュ写真の顔が、祖父の会った警察官と瓜二つだったからである。

その「ある事件」とは、今でも名高い、3億円強奪事件である。

しばらく祖父は、この事を警察に知らせた方が良いかどうか、悩んでいたそうだが、そんなある日、その警察官から連絡が入り、二人で会って話す

ことになったそうである。

祖父の話は、そこで終わり、結局、人違いだったんだよと、笑って孫の頭をなでながら、遠くを見るような目つきで、それ以後、その話をすることは、2度となかったそうである。

その後、祖父が、この警察官とどんな話をし、その後、どんな付き合いを続けたのかは、依頼者の女性にもわからない。

依頼者の女性としては、祖父の願いどおり、メモを隠しに行こうと思うのだが、心のどこかで、事の真相を知りたいという思いもあり、それを実行する前に、探偵さん（コッカー）に相談したという次第である。

依頼者の女性としては、昔、幼い頃に聞いた話が、この遺言に関わっているという確信があった。

コッカーはすぐに返信をし、その女性と会う段取りをつけた。

都内の某有名ホテルの喫茶ラウンジで会った依頼者の女性は、とてもチャーミングな容姿で、育ちの良いお嬢さんと直感的にうかがい知れた。

あらためて、彼女の話のを要約すると、次のような内容であった。

彼女の祖父は、若い頃、かなりの苦勞をしながらも、医薬品の販売会社を立ち上げ、それなりの規模に育て上げた、たたき上げの経営者らしく、

彼女の父親に対しては、非常に厳しい人であったようだが、彼女に対しては、とても優しく、人並みのおじいちゃんとして、可愛がっていたらしい。

今回の昔語りや、ちょっと変わった遺言についても、彼女以外の家族には、何も話していなかったらしく、それもあって、家族以外で信用できる人、という尺度で、どこでうわさを聞いたのか、コッカー探偵事務所に連絡をとった、という次第である。

コッカーは、事の真相を知るには、彼女の祖父と親交があったと思われる警官（？）との接触が必要と考え、彼女に、次のような文面のメモを指定の場所に隠しておくように指示をした。

「祖父が亡くなりました。このことを知らせるように頼まれた孫の若葉と申します。このことを知っているのは、私と叔父（コッカーのこと）の二人だけです。よかったら、事情を教えてくださいませんか。都合のよい日時と場所をご指定いただければ幸いです。」

実際に、相手が同意するかどうか、まったく保証はなかったが、コッカーは、何となく、二人の交流に心温まるものを感じており、それほど危険な事態には至らないだろうという確信はあったが、念の為、叔父という事で彼女のガードをするとともに、話の裏もとろうと思案していた。

メモを隠した翌々日、メモを隠した木の根っこに、ササキと名乗っていた人物からの返信が残っていた。

その内容は、彼女の依頼を引き受けるということと、待ち合わせ場所は、次の日曜日、この公園で、という簡単なものだった。

コッカーは、彼女に詳しいことは言わず、10日の日、メモを見つけた一人の初老の男性について、その素性を手早く、調べてみた。

待ち合わせの日、彼女とコッカーは、くだんの公園で“ササキ”と祖父に名乗っていた3億円事件の犯人かもしれない、という人物を待っていた。

その人物は、約束通りの時刻に姿を現し、ここは寒いからと、近くの静かな喫茶店にコッカーと彼女を誘った。

「実は、この喫茶店で年に一度、あなたのおじいさんと会っていたんですよ。私の名前は、佐々木と申します。」

彼は、それから落ち着いた口調で、これまでの経緯を詳しく語ってくれた。

彼が、彼女の祖父と会った当時、彼は彼女の祖父が思っていた通り、新米の白バイ警官として、慣れない土地でパトロールをしている途中、

将来の進路に思い悩む心の葛藤から、パトロールをさぼって、公園で思案をしていた所だったらしく、そんな最中（さなか）に声をかけられたものだから、

彼女のおじいちゃんからは、何となく、不審がられたのかもしれないと、懐かしそうに笑って話してくれた。

彼の風貌は、どこにでもいる、と言っては失礼だが、特段、特徴のない優しい顔立ちであったが、もしかしたら、若い頃、白バイの姿をしていたら、それなりに、犯人に似ていると思えば、思えたかもしれない。

特に、事件当時は、彼女の祖父も、多少の興奮と偶然の一致（犯罪場所の近く）から、彼を疑ったとしても、仕様のないことだろう。

彼としても、変に疑われたくないと思って、彼女のおじいさんと連絡を取ったのが、事の始まりだそうである。

二人は再開して間もなく、年齢が近いこともあり、すぐに打ち解けあって、お互いの悩みや、将来の進路について、相談しあったそうである。

そして、二人を結び付けた3億円事件に便乗して、秘密の約束を交わしたそうである。

その約束が、今回の件の真相ということらしい。

その約束とは、、、。

二人は、子供の頃のいたずらっ子のように、この事件の犯人と共犯者という役割を演じてみよう、と盛り上がり、

それぞれに、一年に一度、12月10日（事件が起きた日）に会って、お互いの近況を報告し、互いを励ましあおう、

何かつらい事、苦しい事があったら、いつでも奪った3億円で挽回できる、そう思い込むことで、困難を乗り越えていこう、そう誓ったそうである。

それからは、毎年、同じ日にあって、互いを励ましあっていたということで、彼女（孫）の存在についても、彼は生前に聞いていたらしく、

もし、何かあったら、お互いに、秘密の連絡方法で、訃報を伝え、連絡者からの要請があれば、すべてを打ち明け、それと同時に、この遊びも終わりにしよう、

と互いに決めていたそうである。

二人が秘密の約束を交わしてからの人生は、互いに波乱万丈の人生を送りながらも、この秘密が底力の源泉となり、

彼女の祖父は、医薬品の販売会社を切り盛りする創業経営者として成功し、彼も、警官を早くに退職し、元々の夢であった自動車とオートバイの整備工場を立ち上げ、それなりの規模に育て上げたそうである。

彼の話に嘘がないことは、事前に、彼の素性を洗っていたコッカーには、確信できた。また、彼女に同行しているコッカーが、本当の叔父ではなく、彼女のボデーガードという事は、彼にはお見通しという事にも気づいていた。

その後、今後もう二度と、お会いすることはないでしょう、おじいさんのご冥福を心よりお祈り申し上げます、という言葉を残し、彼は去っていった。

彼女は、平凡な話の展開に、ほんの少し、がっかりしたような所もあったが、尊敬するおじいちゃんの秘密の真相を知ったことで、あらためて、おじいちゃんのことを好きになったようである。

彼女と別れる最後に、彼女は、茶目っ気たっぷりに、本当は二人とも、犯人と共犯者だったのかも、と微笑みながら、コッカーにお礼を言った。

「本当に、そうだったのかもしれない。」

コッカーは、内心、そう思いながら、不思議な人のめぐりあわせ、人生の縁（えにし）について、思いを巡らせていた。

さあ、今度はどんな事件が待っているのか、久々にタバコの煙に肺を満たしながら、コッカーは、彼の良き相棒であるパートナー（リング）の待つ事務所（クルーザー）へと、ゆっくりと歩き出した。

うちのワンコは宇宙人

コタロウは、突然の呼びかけに、困惑していた。

呼びかけた相手が、愛犬のシロだったからである。

この犬は、コタロウの家に引き取られて2年になる。

2年前、近所の幼馴染、白石まゆみが捨てられていた子犬を拾って、家で飼いたいと両親に頼んだのだが、妹のめぐみにアレルギー症状があって、無理だということになり、

彼女の母親とまゆみが、以前からペットを飼ってみたいと云っていたコタロウと彼の両親に相談し、その後、コタロウの家で飼われることになった。

そんな経緯もあって、彼女の名字から1字をもらって、この愛犬はシロと名づけられた。

(実際のシロは白い犬ではなく、茶系統の雑種)

そんなシロが、じっと小太郎を見上げ、話しかけてきたのである。

無論、犬だから、口を開けてしゃべった訳ではない。明らかに、目の前にいるシロと思われる様子で、心（頭）に響いてきたのだ。

「おい、コタロウ。やっと僕も人の心と繋がれるようになった。
これからは相棒として、よろしく頼む。」

「よ、よろしく頼むって。お前、本当にシロなのか。
犬が人に語りかけるなんて、まるで、漫画の世界だ。」

「漫画じゃない。現実だ。」

「これから、じっくりと、お前に説明してやろう。」

日曜日の朝、シロとの散歩の途中、公園のベンチで休憩をしていた

コタロウに向かい、人語を話す犬になったシロに驚きながらも、コタロウは素直に、シロの話に耳（心）を傾けた。

シロの話とは、主に以下のような内容であった。

（以下、シロが話してくれた内容を簡単に紹介しよう）

シロ、いや、シロの身体を操って話しかけているのは、この銀河系に暮らしている宇宙人で、精神エネルギーと科学の発達により、銀河系内の調査を幅広く行っている人種だそうで、

地球からは5万光年以上離れている母星から（精神エネルギーとして）飛んできたらしい。

彼も、地球年齢的に言えば、まだまだ、調査員としては駆け出しの若手らしいが、地球人類からすれば、恐ろしく物知りで、数々の超常能力を駆使できるそうだ。

5万光年もの距離を瞬時に飛んでくるのは、どういう技術、理屈なのか、難しいことはわからないが、地球人の知識に当てはめれば、ワープ技術を使っているらしく、

宇宙にあふれている波（エネルギー）を上手に利用し、銀河系の星々に調査員を派遣しているらしい。

精神エネルギーとして活動するには、人間のような高等生物よりも劣りつつ、無垢な心をもっている生物の体を借りる必要があるらしく、

この宇宙人が飛んできた際、ちょうど入りやすかったのが「シロ」であつたらしい。

ただ、精神エネルギーの憑依は、実際の身体の負担も大きく、星々の生態系に生息できる時間は限られているそうで、地球時間にすれば、1日、5～6時間程度が、彼の活動（調査）限界になるらしい。

彼らの調査の目的は、各星に生息している生物や植物、鉱物、微生物などを幅広く研究し、その成果を活かし、母性の発展につなげる事。

こういった調査は母性の発展に役立てるのが目的で、それぞれの星の生態系に過度に関わるのは禁止されているらしいが、

研究に必要と思われる範囲での干渉は、それぞれの調査員の判断にゆだねられているようだ。

ただ、正規の調査員以外に、別の目的で星々を巡っている（彼の星では非合法的）輩も多くいるらしく、そういった輩（闇の勢力）を見つけ、排除するのも調査員の仕事になるらしい。

本来、人とのかかわりを避けていた宇宙人である彼が、コタロウに正体を打ち明け、パートナーとしての援助を頼んだのも、

そういった輩（闇の勢力）の存在に気付き、早目に撃退することが目的だったらしい。

と、こういった事情で、コタロウは、シロとの新しい関係を築くことになったのだが、

シロの依頼で、コタロウ以外の人には気づかれないようにしてほしい、ということだったので、

その後、周りからは、それほど不審に思われないように気を付けながら、シロとのコミュニケーションを深めていった。

ちょっと困ったのは、シロと大の仲良しである「まゆみ」に、この事を秘密にすることであった。

コタロウは高校2年生で、まゆみは1歳下の1年生。

コタロウも思春期で、ここ数年、まゆみを異性として意識し始めていたが、まゆみにはそんなそぶりは見せず、多少つつけんどんな態度で接していた。

まゆみは、そんなコタロウの内面には気づいている風はなく、いつも気さくに、時にはあけっぴろげに、いろんな悩みや日常の事柄をコタロウに打ち明けていた。

そんな関係だからこそ、宇宙犬になったシロのことを話したほうが良いのではと悩みつつ、宇宙犬のシロに、時期尚早といさめられながら、悶々とした日々を送っていた。

シロが言うには、この秘密を彼女に話せば、彼女が危険に巻き込まれる可能性がある、ということだったのだが、

じゃあ、俺はいいのか、と思いはしたが、いやいや、ここはシロが自分を信頼してくれたからだと自分を納得させ、

シロの云う通り、しばらくの間、彼女には黙っておくことにした。

ただ、そのことで、コタロウとまゆみは、思いもかけない事件に巻き込まれていくことになるのだが、、、。

そんなコタロウとシロとの一件（接触）が起こった頃のある日、隣町の空き家の一室で一匹の黒猫が、クククッと、まるで人間のような薄ら笑いをしていた。

実は、この猫には、シロの追いかけている宇宙の星々に波乱の種をまき散らすことを楽しみ（生業）にしている、というもう一人（一匹）の宇宙人が憑依していた。

名前は、ブラックとしておこう。

彼も、シロと同じ頃、この地球にやってきたのだが、その目的は、決してシロのような学術的なものではなく、

人間のような高等生物の精神エネルギーのメカニズムを研究し、自身の超常能力を高め、母性の権力闘争に活かすことであった。

彼は、これまで黒猫のブラックに憑依し、人間たちの生態について研究を続けていたのだが、

そろそろ、誰かの力を借りて、この地球における精神エネルギーの可能性を実践してみたいと思っていた。

そんな頃、出会ったのが、この空き家をアジトにしている不良高校生の
大津波ケンジであった。

彼の心に渦巻く精神エネルギーの高さに驚いたブラックは、彼との
接触を試み、今日ついに、彼とのコンタクトに成功したのだった。

ケンジは、この不思議な猫に興味を示し、高校生とは思えない度量を
示し、ブラックの話（テレパシー）に心を集中させていた。

ある程度の経緯を話した後、ブラックはケンジにこんな提案をした。

「俺は、お前の欲望を発散させる大きな力を与えることができる。」

「また、それはお前自身の内在的力の証（あかし）でもある。どうだ、
俺と組んで、面白おかしく世の中をかき乱してみないか。」

ケンジは、その話に興味を示しながらも、物おじしない態度で、自信
たっぷりに話すブラックに向けて、こう切り返した。

「なかなかいい話だが、お前の本当の目的は何なんだ。俺は、人に使
われるのは御免だし、言いなりになって、後で、とんでもない結末
を迎えるのも勘弁してほしい。俺自身に納得できる答えがなければ
協力はできない。」

ブラックは、そんなケンジのふてぶてしさに舌なめずりをしながら、
いかにも楽しそうに、こう答えた。

「これは、俺とお前との同等の取引だ。俺はお前を通して地球人の精
神エネルギーを自らの力に取り込んでいく。お前は、俺の力を借り
て自らの精神エネルギーを开花させ、いずれは、お前自身が、自由
気ままに、その力を用いて、おのれの欲求を実現させていく。どう
だ、この条件で、俺とパートナー契約を結ばないか。」

それは、まさに悪魔との取引であったが、ケンジは、何かを得るため
には、何かを差し出さなければいけない、という人生の掟（不文律）
があることを承知しており、

今は、目の前にいる不可思議な生き物、宇宙猫であるブラックの提案を受け入れることにした。

ここから、いよいよ、この物語が大きく動き出していく。

そして、そんなある日、学校からの帰り道、友達とたわいもない恋愛映画の話題で盛り上がっていたまゆみの前に、突然、目の前にサッと黒猫が躍り出てきた。

一瞬、びっくりして立ち止まったまゆみをキッと見上げ、その黒猫は、一声“ミャー”（お前か）と、するどく、威嚇するような鳴き声を上げ、その後、堂々と踵を返し、静かに立ち去っていった。

その後、コタロウの家にやってきたまゆみが、少しおびえた様子で、その話をコタロウに話していると、

いつもなら、嬉しそうに、まゆみにじゃれついているシロが、まゆみには気づかれないように気を付けながらも、

緊張をした様子で、じいっと佇んでいるものだから、

不安を感じたコタロウは、とりあえず、また、何かあったら、すぐに連絡をしてほしい、とだけまゆみに伝え、その日はそれで、別れることにした。

まゆみを帰した後、シロは、非常にまじめな態度で、コタロウに事情を話してくれた。

その事情とは、、、。

「いよいよ、闇の勢力が動き出したようだ。すぐに、彼女に危険が及ぶことはないと思うが、早目に、彼女に“コトの次第”を話しておいた方がいいだろう。」

コタロウは、不安になってシロに尋ねた。

「でも、何で、まゆみがシロと関係があるって、わかったんだろう。」

シロは、申し訳なさそうに答えた。

「最初に精神エネルギーを接触させた相手には、独特の強い匂いが刻み込まれるのだが、おそらく奴（黒猫）は、その匂いに気づき、彼女を通して、俺に警告を与えたんだろう。」

コタロウは、びっくりして、さらに、シロを問い詰めた。

「で、でも、最初に、彼女に黙っていよう、って言ったのは、シロの方だけ。なぜ、僕じゃなく、彼女だったんだ。」

シロは、シュンとした感じで、その言葉に答えた。

「すまん。どうやら、地球に来た当初、慣れない段階でまゆみと接し、無意識に彼女の精神性に触れてしまっていたらしい。」

「俺自身は、今はコタロウとの関係性が強く、それほど彼女に匂いがついていとは思われず、彼女を守るつもりで、今以上の接触を避けていたんだが、、、。」

「その匂いの付き具合については、自分自身では感知するのが難しく、別の憑依者でないと、はっきりとは区別できないんだ。」

シロの説明に、しゅしゅと納得しつつも、これから、どう相手と戦い、まゆみを守っていけばいいのか、悩み始めるコタロウだった。

その後、シロと相談の上、シロが一旦、母性に戻り、仲間たちと相談の上、再度、地球に戻ってくる頃合いに、まゆみに事情を打ち明け、

その後、3人（2人と一匹）で善後策を講じよう、ということで話がまとまった。

だが、恐れていた事件は、シロが地球に戻る前に起こってしまった。

まゆみが、あれから数日後、隣町にある大手のCDショップに、自転車で予約していた人気歌手のCDを取りに行った帰り、

暗くなりかけた路地で、再び、あの黒猫が現れ、慌てて、自転車を止めると、今度は、その背後に、数人の不良グループが固まり、まゆみの方へと、ニヤニヤ笑いながら、無言で近づいてくるのであった。

まゆみは、急いで、元の道を引き返したが、その前には、またしても、黒猫と不良グループが待っていた。

こういった追いかけっこを続けるうちに、知らず知らずのうちに、まゆみは、黒猫と大津波ケンジの拠点となっている例の空き家に、誘い込まれていった。

「フフッ、これでもう、彼女は自由を奪われた。後は、彼女を餌に、奴が現れるのを楽しみに待つだけだ。」

ブラックが、そう言うと、ケンジが可笑しそうに笑って続けた。

「えらく、嬉しそうだな、ブラック。同胞に合うのが、そんなに待ちきれないとは、、、。お前の敵って言う割には、まるで恋人を待っている盛りの猫だぜ。」

「ああ、そうだな。俺には、恋人以上の存在かもしれない。」

ブラックがケンジに怒るでもなく、やんわりとその問いに答えた時、一瞬、彼らが陣取っている空き家の庭に、強烈な光が射した。

その光に動揺したブラックたちの一瞬のスキを突いたのか、まゆみは、彼らの呪縛から解かれ、その光を放った影の後ろに確保されていた。

「お、お前が、ブラックの云っていた同胞、敵なのか。」

ケンジが大声で放った先にいたのは、一人の若い女性だった。

ただ、日本人にしては、肌が浅黒く、南方系の人種のようにだった。

「ああ、よかった、間に合った。」

そこに急いで駆けつけてきたからなのか、息をはあはあさせながら、

まゆみのそばへと、コタロウが駆け寄ってきた。

「まったく、この人がいなければ、どうなっていたか、。。。」

実は、そこにシロもいたのだが、宇宙犬としてのシロではなく、今もただの雑種の犬のままであり、コタロウの後を追って、ついてきたに過ぎなかった。

「き、貴様は、どうしてここへ、、、。」

一人、事の次第を理解したブラックが、悔しそうにうなり声を発しながら、ケンジに目配せをし、驚くような速さでその場を離れていった。

その時、突然シロが咆哮し、ブラックに飛びかかっていったが、ほんの一瞬の差で、彼らに逃げられてしまった。

退散した後、ケンジが悔しそうに、何故、あいつらと一戦を構えなかったんだ。その為に、俺はお前の訓練を受けてきたんだぜ、と不満をぶちまけたのだが、、、。

ブラックは、静かに、諭すように、ケンジに答えた。

「まあ、そう焦るな。機会は、いくらでも作ってやる。本番は、まだまだ、これからだ。ただ、今日の相手は悪かった。奴は、俺や奴（シロのこと）のような半獣半人ではなく、人間と同化している存在だから、どう戦っても今は勝てない。お前の力がパワーアップされるまでの時間が必要だ。だから、戦いを避けたんだ。」

その頃、窮地を救いだされたまゆみが、宇宙犬シロのことや、これまでの経緯（いきさつ）について、コタロウから説明を受けていた。

その頃には、シロも宇宙犬として、まゆみと初めて向かい合っていた。

「それにしても、サラさんが突然、家の玄関に現れた時は、びっくりしたよ。しかも、言葉は通じなくても、心に語り掛けてくる言葉は、不思議と理解できるんだから、シロとのことがなかったら、気を失っていたかもしれない。」

照れながら、コタロウは、その謎の女性、サラとの出会いを思い返した。

「サラさん、ありがとう。あなたがいなかったら、私、どうなっていたかわからないし、怖かったし、本当にあなたのお陰で救われました。」

そんなまゆみの言葉に、やさしい笑みで応え、ウィンクをするサラとは、いったい何者なのか。

ここで、彼女の正体について、解説しよう。

彼女は、シロが地球を訪れる数年前から、別のプログラム、長期間にわたっての知的生命体の研究プロジェクトとして、決死の覚悟で意識不明になった人間に同化したシロと同じ母性の宇宙人なのである。

地球人としてのサラは、突然の交通事故で頭を強く打ち、脳死寸前の状態だったのだが、そこに、宇宙人としてのサラの精神が運良く同化し、命が救われたのである。

場所は、シンガポール。

サラの自我と宇宙人サラの精神が折り合いをつけるリハビリ期間を経て、シロやブラックよりも強力なサイキックパワーを武器に、

シンガポールを中心に、地球及び地球人の調査活動が行われていたのである。

現在、このような活動をしている地球内での宇宙人はサラだけなのだが、全宇宙には、地球を含めて非合法に活動している宇宙人もいるそうだ。

ただ、先ほど“決死の覚悟”という表現をしたが、シロやブラックのように、完全に憑依するのではなく、限定的な時間の中で、精神的な通路を利用するやり方であれば、それほど母性での本来の身体は影響を受けないのだが、

長期間、数年とか、数十年単位の場合、本来の身体は、相当の負荷を受けることになり、時には、そのまま目が覚めず、憑依した身体の寿命とともに、死を迎えるということも少なくない。

彼ら、宇宙人の本来の寿命の数分の一しか、生きられないというリスクを抱えているのである。

だが、サラは、そんなリスクも厭わず、未知への冒険（研究）に挑んでいるのである。

シロは、母性に頼んで、今回、緊急事態ということで、地球に戻る前から、サラに連絡し、助けを求めているのである。

サラとシロは、今回の事件を通し、今後の地球でのブラックやケンジたちの活動に、危惧と不安を抱いていた。

別の銀河で、悪の心をもった宇宙人の暗躍により、滅んでしまった知的生命体の例も、いくつか確認されているからだ。

シロとサラ、そして、コタロウとまゆみの活躍の物語が、ここから始まっていくのだが、その物語は、また、いずれ時が来たら語ることにしよう。

ブラックとケンジは、この後、反撃までに多少の時間が必要のようだから、、、。

キャラメル

その子は、毎年、同じような時期に転校してきた。

地味で、目立たず、大人しく、誰とも親しくならないまま、一ヵ月程で転校していくので、すぐにみんなから忘れられ、

一年後、転校してきたときに、そういえばと、みんなの記憶によみがえるが、またすぐ、転校していくので、

結局、一人の友達もできないままに、忘れられていくのが常だった。

そして、今年、また同じ繰り返しになるかと思っていたが、ある事件をきっかけに、僕は、その子と親しくなり、

思いもかけない経験をすることになった。

その子は、どうやら、旅芝居一座〔大衆演劇〕の誰かの子供で、一年中、いろんな地方を回っており、

そんな理由で、その一座の子供たちも、各学校を転々として
いるらしい。

実は、この話は、近所のおばさんたちからお母さんが仕入れてきた噂話を、何気に聞きかじったものだ。

詳しいことは、よくわからない。

最近は学校側も、個人情報¹の流失に気を使っているらしく、親の商売や住まいなどは、一切公開していないし、

先生たちも、そういう話には触れないように気を使っている。

彼女が、僕の学校に転校ってきて、今年²は3年目になるが、彼女と同じクラスになったのは初めてだった。

僕も、彼女と同じように、控えめで、大人しく、目立たないタイプだったが、それでも、彼女ほど孤独ではなかった。

ただ、彼女は「孤独」というよりも、ちょっと難しい言葉になってしまうが、「孤高の人」といった方が似合いそうな、

そんな、ちょっと近寄りがたい威厳をもっているタイプの女の子だった。

(ちなみに僕は、自分では孤高の文学少年だと思っている。

誰も、認めちゃあくれないけどね、、、。)

そんな彼女だから、親しくなる友達もいないし、かといって、いじめの対象になったりもしない。

どうせ、すぐにいなくなるんだからと、周りからは近寄っていかないし、本人も全く気にしていないようだ。

ある日、授業が終わり、帰り支度をしている時、ふと窓を覗くと、校門の所に低学年らしい男の子が立っており、

そこに、例の彼女が現れ、その男の子と手をつないで、校門を出ていくのが見えた。

どうやら、弟も一緒に通っており、登下校時には、彼女がお母さん代わりに、弟の面倒を見ているのかもしれない。

何だか、彼女には似合っているように思えたし、僕の推測は、けっこう的を得ることが多いんだ。

(時々、思い込みが強すぎて、大きく空振りすることもあるんだけど、、、。)

お母さんから聞いた噂話以来、何となく、彼女への興味を募らせていた僕は、ちょっとした探偵気分、彼女の後を追ってみることにした。

小走りに、彼女が消えていった方向にかけていくと、ほんの数分で彼女に追いついたのだが、

そこで、僕は彼女の本当の姿（強さ）を見ることになった。

そこ（川べり）では、浮浪者（ホームレス？）の周りに、何人かの中学生がたむろし、

遊びのつもりなのか、全員で嬌声を上げ、その浮浪者を囃（はや）し立てていた。

丘の上に立って、その様子に気付いた彼女は、意を決したように、

弟にそっと何かをつぶやき、そこに腰を下ろさせると、すぐに、中学生たちの群れに向かっていった。

「やめなさい！」

その声は、遠く様子を見ていた僕の耳にも、じい〜んと響く程、迫力のある大音声だった。

一瞬、中学生たちの嬌声が止み、彼らが声のした方向を見て、さらに、びっくりしたようだった。

そこには、小学生の女の子が、たった一人で立っていたからだ。

リーダー格らしい中学生が、何か云おうとした時、さらに、彼女が、たたみかけるように言った。

「弱いもん、いじめる奴は、地獄に落ちるぞお〜！！」

その迫力に押されたのか、少しずつ、周りに人が集まり始めたからなのか、

そのまま、中学生たちは、逃げるように走り去っていった。

それは、一瞬の出来事であり、まるで芝居を見ているような気分だった。

「そうか、そうか、これが、彼女の本当（本気）の姿（演技）なんだ。」

僕は、放心したように、その場に立ち続けていた。

気が付くと、弟の手を引いた彼女が、僕の前に立っていた。

「あんた、同じクラスの一平くんだね。」

そう、僕の名前は鈴木一平。そして、彼女の名前は、山本幸代（さちよ）と云った。

彼女は、僕が後を追っていたことに、気づいていたのかどうか、確かなことはわからなかったが、

姉さんが弟に問いかけるようなやさしい口調で、僕に声をかけてくれた。

「うち、芝居小屋やけど、興味あるんやったら、おいで。」

僕は、コクンと小さくうなづいて、黙って彼女の後について行った。

何か、照れくさいような、恥ずかしいような、でも、彼女の凜とした佇（たたず）まいが、

気恥ずかしい僕の心を、しゃきっと、奮（ふる）い起こさせてくれた。

歩いている途中、弟と僕に、スカートのポケットの中から、キャラメルを取り出して、それぞれ一個ずつ渡してくれた。

「キャラメルをたべるとなあ、元気が出るんやでえ。」

彼女は、満面の笑みで、そう云って、自分も一個、ポ〜ンと口に放り込んだ。

何か、それで、3人の心が一つになったようで、とても僕は嬉しく、じんわりと温かぁ〜い気持ちになった。

その夜、少し帰りが遅くなり、お母さんにこっぴどく絞られる結果になったが、彼女との一件は、何だか言いそびれてしまった。

しばらくは、自分の心の中だけにしまっておきたい、秘密にしておきたい、と思ったのかもしれない。

それは、今までに経験したことのない、不思議な感情だった。

それから、何度となく彼女の家〔芝居小屋〕に通う内、

彼女が芝居小屋の人たちから「キャラメル」というあだ名で呼ばれていたたり、

お客さんたちから「さっちゃん」と呼ばれ、常連さんを中心に親しまれ、かわいがられており、

一座ではけっこうな人気者だということもわかってきた。

クラスの子や、お母さんも知らない、そんな話を、僕だけが知っている、という現状に、大いに僕の心は満たされていた。

そんな矢先、彼女がついに、この町を去ることになった。

いつものように、彼女は淡々と学校を去り、クラスの皆も、何事もなかったかのように、彼女の存在を忘れていった。

ただ一人、僕を除いては、、、。

いつもの丘の上で、彼女を最後まで見送った僕に、彼女はニッコリ微笑んで、僕に2個のキャラメルを渡してくれた。

「今日は大サービスや。またいつか、遊ぼうな。」

そんな彼女の言葉に、グッと涙をこらえ、僕は相当の勇気を出して、彼女に応えた。

「きっと、きっと、もう一度会おう、会いに行くからね。」

その後、中学、高校になっても、彼女が転校してくることはなかった。

それでも、きっとまた会える、僕にはそんな確信があった。

ポケットの中には、今日もしっかりと、キャラメルの箱が入っている。

スリーピング・ヒーロー

ヒロシは、夢や希望などというものは、小説やドラマの中だけのものであって、自分には、永遠に縁のない代物だと思っていた。

彼は、もうすぐ30歳にもなろうというのに、ちゃんとした正規の職にも就かず、半年から1年間隔で、単純作業のアルバイトや工場労働といったブルーワーカーの仕事を渡り歩いていた。

当然、生活に余裕はなく、何とか親元にいることで、ちょっとした趣味に興じるくらいの楽しみを確保していた。

ヒロシの趣味は、昔の漫画本を集めて読みふける事だった。

最近のアニメや漫画、ゲームなどには、何となく馴染めず、古本屋で手に取った昭和のヒーローものを読んで以来、そのとりこになり、少しずつ、気に入った作品を集めるようになった。

特に好きなのは、本宮 ひろ志（名前が一緒なのも気に入っているらしい）の『男一匹ガキ大将』だ。

彼の学生時代は、何の変哲もなく、淡々とした味気ないもので、その分、漫画の中で繰り広げられる壮大なストーリーには心が躍り、

読後の一瞬間は、自分もヒーローになったような気分で、日頃の鬱屈を少しだけ晴らせたようでもあり、唯一の至福の時間であった。

そんなある日、ヒロシに悲劇が訪れた。

通勤の途中、いつもの十字路を自転車でサッと過ぎようとした時、猛スピードで左から走ってきたトラックにはねられてしまったのだ。

重体ながらも、何とか一命をとりとめたヒロシだったが、その意識は戻らず、手術にあたった医師も、意識が戻る可能性は、かなり低いだろう、という見解を家族（彼の両親）に示していた。

そして、医者は、家族に次のような話（相談）をするのだった。

「このまま植物人間として生き続けることは可能でしょう。でも、それは、残された家族に大きな負担を強いることになります。」

「それでも、安楽死《この時代、家族の同意があれば、一定の条件（ヒロシのような植物状態や末期の癌など）の元、安楽死させることが認められていた》を選択するのは、家族には容易ではありません。」

「そこで、提案ですが、スリーピング・コミュニケーターを使って、患者の意思を確認し、その上で、最終判断をされてはどうでしょう。」

スリーピング・コミュニケーターとは、特殊な訓練を受けた一種のエスパーで、専門の医療機器を用いて、ヒロシのような意識の回復が難しい患者と潜在意識化で接触する人間のことを言う。

コミュニケーターが接触した情報を信じるかどうかは、家族次第ではあるが、それでも、一応本人の意思が確認できるとあって、

家族の下す決断の重さも、随分と和らげられると評判を呼んでいる最新の治療法だ。

彼の両親は、その医者に、迷うことなく、コミュニケーターの手配をお願いをすることにした。

彼と接触することになったのは、まだ20代の中頃と思われる若い女性であった。

両親は、年配の女性をイメージしていたので、かなり驚き、不安にもなったが、その女性の落ち着いた話しぶりに、徐々に落ち着き、

ものの数十分も立たない内に、彼女に対して絶対的な信頼を寄せるまでになった。

それだけ、彼女が優秀なコミュニケーターであるという証拠だろう。

彼女の名は、サオリと云い、コミュニケーターとしての仕事に誇りをもって、患者や家族の為に、献身的に取り組んでいた。

いや、人生の全てを捧げているといってもいいくらいの取り組みようだった。

何故、そこまでストイックになるのか、その理由（わけ）を知るために、いずれ、彼女の過去にもふれざるを得ないだろう。

そして、いよいよ、彼女がヒロシと接触する時を迎えた。

その頃、ヒロシは、あこがれの『男一匹ガキ大将』の世界に入り、主人公を含めた多くの登場人物たちと丁々発止を繰り広げる堂々としたスーパーヒーローになりきっていた。

彼の心のどこかでは、この世界が夢、幻の世界であり、リアルな現実世界に戻るには、多分、目を覚まし、この世界に背を向けるしかないとわかってはいたが、

この素晴らしい世界に、終わりを告げる気には、到底なれなかった。

もし、このまま目を覚ますことなく（現実世界で）死んでしまったとしても、悔いはないと考えていた。

そんな時、ヒロシの目の前に、突然、サオリが現れたのだ。

彼は、驚いた。

サオリは、自分の過去（現実世界）を詳しく把握していた。

何故、何故、何故、、、。

彼は、サオリに問いかけた。

「君は、何者だ。どうして、俺の過去を知っているんだ。」

サオリは、静かにヒロシに語りかけた。

「あなたは今、現実と死者の世界との境界線にいるの。」

「現実の世界では、あなたを安楽死させるかどうか、ご両親が
悲しみと絶望に心を痛めながら、とても、悩んでらっしゃるわ。」

「だから、私が、あなたの意思を確認するために、ここへ送られて
きたの。」

「あなたは今、楽しい気分かもしれないけれど、それは同時に、
あなたを思ってらっしゃる人たちに、果てしない苦しみを課す
ことにもなるのよ。」

ヒロシは、ぶるぶると震えながら、彼女に問いかけた。

「じゃ、じゃあ、もし、両親の苦しみを救うために、安楽死を
選んだとしたら、俺が今いる、この世界はどうなるんだ。」

サオリは、きっぱりと答えた。

「あなたは、無の存在になる。そして、いつか、新しい意識（魂）
として、現実の世界に帰っていくの。それが、人間の定めなの。」

ヒロシは、既に、現実世界の平凡な人柄（本当の姿）に戻っており、
サオリの言葉に言い返せないながらも、心の底からの言葉を発して
いた。

「オ、オレは、夢や希望のない現実世界になんか戻りたくない。
ずっとずっと、この世界で暮らしていきたい。」

「お願いだから、そっとしておいてくれえ〜。」

叫びながら、ヒロシはサオリに背を向け、駆け去っていった。

その姿を、サオリは、哀しいまなざしで見つめ続けていた。

現実世界に戻ったサオリは、両親に、次のように語った。

「ヒロシさんは、安楽死の話に戸惑っているようでした。出来れば、

このままそっとしておいてほしい。そんな、返答でした。」

「無理もないと思います。後は、ご両親の判断です。あまりお役に立てず、申し訳ありませんでした。」

数日、迷った両親は、自分たちの先行きもわからないことから、泣く泣くではあるが、安楽死という道を選択した。

その話を聞いたサオリは、医者と両親に、最後にもう一度だけ、彼と接触する機会をつくってほしいと頼み込んだ。

彼女は、以前、とても愛する人を事故で失っていた。

正確に言えば、今回のヒロシと同じように、植物状態となった彼を救えず、結果的に、安楽死という道を選ばざるを得なかったのだ。

その当時、彼女はコミュニケーターとしての駆け出しで、彼との接触は、別のコミュニケーターに頼らざるを得なかった。

そのコミュニケーターが、彼が「安楽死」に納得し、残った人たちへの感謝の言葉を語っていたと聞いたとき、彼女は微妙な違和感を感じていた。

本当に、そうなんだろうか。

そんなに、淡々と、この世に別れを告げられるんだろうか。
若い彼女には、とても納得できなかった。

その後、正式なコミュニケーターとなってからも、彼女は人間の
本質や潜在能力について、独学で学び続けていた。

人間とは、何だろう。

生きるって、どういうことなんだろう。

コミュニケーターとして、多くの死線をさまよう人たちと接触をして
いく中で、彼女は一つの気づきを得ようとしていた。

人間には、いろんな感情が備わっている。

そして、その感情は、生きている中で、激しくもまれ、かがやき、一人一人の個性や尊厳を形作っていく。

人は生まれながらに、逃れられない宿命を背負っている。

それでも、種としての人類は、確実に子孫を残し続けている。

一人一人の人生は、小さな小さな一本道かもしれないが、その道がいくつも重なっていく中で、いずれは大きな大河となり、

人類という大奔流が流れ続ける。

生きていくこと、人生とは、一瞬一瞬の意識と無意識との葛藤だが、生きるという選択は、常に称賛されるべき決断ではないだろうか。

特に、苦しく厳しい局面、境遇においては、、、。

人は、それを悪あがきだと言ったりもするが、本当にそうだろうか。

もし、大きな罪や間違いを犯せば、その償いとして、安直に死を選ぶのではなく、生きて贖罪を晴らす、という道を選択する。

その行為は、人間ならではの決断、判断ではないだろうか。

自分は、悪くないのに、何故、こんなに苦しく、つらいのか。

それでも、より良い人生を信じて、苦しくても、つらくても、生き続ける。

その思い（感情）こそ、人間の気高さのような気もする。

ただ、彼女が関わっている現実世界、安楽死の問題は、単純に「生きる」という意味を問うだけの問題ではないような気もする。

そこには「生ききる」という〔永遠不変の〕人類のテーマも見え隠れしている。

どう、生ききればいいのか。

本当に、生ききったのか。

その答えは、一人一人で違っている。

当然だろう。

一人一人の思い、感情は、一人一人で違っているのだから。

それでも、哀しいかな、愚かな人間は、その答えを探し続けている。

ゆるる思いを噛みしめながら、サオリは再び、ヒロシの住む世界へと己の意識を集中させていった。

彼女は、一つの決心、思いを胸に抱いていた。

彼の魂を、人間の尊厳を、もう一度確かめてみよう、信じてみようと、。。

ヒロシは、彼の世界のトップ、スーパーヒーローとしての日々に埋没しきっていた。

素晴らしい世界だった。

全てが、彼の意のままだった。

誰もが彼に従い、彼を称賛した。

でも、心のどこかに、冷め切った自分がいて、いつかの女性（サオリ）の姿、言葉に、少しずつ惹かれ、

納得している自分に、とまどっていた。

「俺の住む世界は、本当にここなんだろうか。」

そんな思いがよぎった時、突然、目の前にサオリが現れた。

「き、君は、どうして、ここへ、。。。」

「あなたに、私の最後の希望を託したくて、戻ってきたの。」

サオリは、やさしいまなざしで、ヒロシに語り始めた。

「私には、わかる。あなたには、現実世界に戻れるだけの強い意志とパワーが備わっていることを、。。。」

「その力は、決して、この（まやかしの）世界では、使えないことを、あなたもわかっているはずよ。」

「生きることをあきらめないで、。。。」

「もうすぐ、あなたのご両親の悲しみに見送られて、現実の世界で、あなたの命の灯が消されようとしている。」

「あなた自身の力で、その現実を変えてほしいの。」

「きっとできる、必ずできる、私は信じている。」

ヒロシは、彼女と目を交わすうちに、自然と涙が流れ、身内に熱いものがこみ上げてきた。

「俺は、俺であることを、放棄していたのかもしれない。もう一度、ありのままの自分に戻ってみよう。」

「サオリさん、俺、頑張ってみるよ。」

自分を信じてくれる人がいる。

その喜びに背中を押され、ヒロシは、さらにサオリに問いかけた。

「サオリさん、俺は、今、本気で現実世界に戻りたいと
思っている。」

「今の俺には、わかる。夢や希望は、誰かが与えてくれる
もんじゃない。自分で悩み、考え、生きて、手繰りよせる
ものだってことを、。」

「サオリさん、教えてください。現実世界に戻るには、
俺は、どうすればいいのか、。」

サオリは、優しく微笑みながら答えた。

「チャンスは、一度だけよ。ヒロシさん。」

「この後、私は病室のあなたの手に、そっと私の手を
重ねます。」

「そのぬくもり、鼓動を感じたら、ほんの少しでいいから、
握り返す努力をしてください。」

「その波動は、必ず私が受け止めます。」

「私を信じて、頑張ってね。」

「本当の世界、現実世界で再会できることを楽しみに
しています。」

最後の言葉を発すると同時に、彼女の姿は忽然と消えた。

その場所に佇み、ヒロシは、今までに味わったことのない
ほどの夢と希望に心を満たしていた。

「よぉ～し、ここから、俺の本当の人生が始まるんだ。
俺はあきらめない、もう、決してあきらめない。」

「生きることを、生き続けることを、決して投げ出さないぞ。」

サオリは、病室に戻っていた。

医者と両親に、10分間だけの猶予をもらって、彼女は、ヒロシの右手に、そっと自分の手を重ねた。

「ヒロシさん、私はここにいます。」

「ここにいる私が本当の私、生きている現実の私です。」

1分、2分、3分と短い時間が過ぎていく。

医者も両親も、ほとんど諦めている中で、サオリだけは、ヒロシの返事を待ち続けていた。

信じ続けていた。

9分、9分10秒、15秒、30秒、、、。

容赦なく現実の時刻（とき）は流れ続け、医者が安楽死の準備を始めようと立ち上がったその時、奇跡が起きた。

ヒロシの小指が、ほんの少し、内側に動いたのだ。

それは、ヒロシにとっては、死神との必死の攻防だった。

そして、ヒロシは、その死神に打ち勝った。

本当のヒーロー、現実の世界のヒーローになれた瞬間だった。

「信じてよかった。本当によかった。」

サオリは、ヒロシから、人を信じることの素晴らしさを学んだ。

数年後、順調にヒロシは回復し、病院でリハビリに励んでいた。

ベッドの傍らには、サオリからの絵葉書が置いてあった。

そこには、こんな文章が綴られていた。

「あなたに、新しい夢が芽生えたことを喜んでます。小説家の道、大変だと思いますが、頑張ってください。」

「私はいつもあなたの味方、あなたの夢を応援しています。」

「私は今、コミュニケーターとしての新たな一歩を歩むために、ニューヨークにきています。」

「私も、少しずつ、多種多様な人類の生きざまを見極める、という夢に向かって邁進しています。」

「お互い、励ましあいながら、夢を追い続けましょう。」

窓の外では、子供たちの声が響き、白い入道雲が、夏の季節を彩るように、まぶしく輝いていた。

招待状

もうすぐ20歳の満男は、都内、某大学の学生で、世にいう、アイドルオタクである。

バイトで稼ぐお金のほとんどを、週末のアイドル追っかけ費用につぎ込んでいる。

少し、他のアイドルオタクと違うのは、ファン同士の交流には消極的で、一人、黙々と気になるアイドルの動向を追い続ける、その姿勢だろう。

一般的には、ファン同士で盛り上がって、お祭り気分でアイドルのイベントを楽しむのが、オーソドックスなファン心理だし、

アイドルにとっても、安心できるファンの在り方なのだが、、、。

まあ、こんな暗いタイプのファンも多くいるのが、女性アイドルの世界なのだからと、少し、気味の悪さを感じながらも、

彼女達は、笑顔を振りまき続けている。

満男にとっても、アイドルである彼女たちにとっても、今は、貴重な青春の一コマ一コマなのだ。

そんなある日、満男に一通のメールが届いた。

満男が応援しているアイドルを支援する番組企画を立ち上げるので、応援〔参加〕してくれるファンを募集しているという。

自分自身が取り上げられ、スポットが当たることは苦手な満男だったが、彼女たちの応援の力になれるんだったら嬉しい、という気持ちで応募してみることにした。

すると今度は、一通の招待状〔封筒〕が届いた。

「アイドルを探せ」という番組企画への招待状で、彼（満男）が、

その主人公に選ばれたというのだ。

ただ、その企画では、本人のプライバシーに配慮し、顔や名前などは出しません、と明記してあったので、ちょっと嫌な予感があったが、承諾の返事を出すことにした。

すると、次に、具体的な指示がメールで届いた。

そこには、企画を実行する日時が記してあった。

まず、先日届いた招待状をもって、某駅の指定されたコインロッカーに指示書を取りに来ること。

招待状と差し替えて、その指示書を取り、その指示に従い行動すること、と書いてあった。

満男は、どんな結果が待っているのか、どんな形でアイドルと会えるのか、期待に胸をふくらませながら、その日を迎えた。

一枚目の指示書には、彼女が通っているケーキ店で、彼女の好きなチーズケーキを購入することと書いてあった。

その後、その店のケヤキの前にあるベンチに座り、座面の裏を探れ、と指示があり、探してみると、次の指示書が貼ってあった。

そこには、今日のイベントに、そのチーズを差し入れすること、と書いてあり、満男は、その足でイベント会場に行き、スタッフらしき人に、そのチーズを差し入れた。

次の指示は、イベント終了後、指定されたトイレの個室に入ること、と書いてあった。

そこでは、これまでの指示書はそこで破棄し、水タンクの裏側に貼ってある新たな指示書の指示に従うこと、と書いてあった。

満男は、前の指示書を破棄した後、次の指示書にじっくりと落ち着いて、目を通した。

そこには、次のような指示が記してあった。

ハンティング帽子をかぶり、マスクをつけて、いかにも怪しい態度で、彼女のマンションの周りを徘徊すること、と。

シナリオ的には、彼が暴漢役で、後程、次の指示に従い、彼女の部屋に侵入した後、勇敢な彼女の活躍で撃退される、というものだった。

役柄的には断りたいタイプの役柄だったが、彼女と寸劇を演じられる、という喜びが大きく、

満男は、彼女の歡心を買うためにも、一生懸命、与えられた役割を演じようと決意した。

最後の指示書は、マンション近くの公園にある大きな樺の木の根元に浅く埋められていた。

そこには、これまでの指示書について、読み終わった後は、公園の池に捨てるよう指示してあった。

満男は、これからの段取りをしっかりと頭に叩き込んだ後、指示に従い、指示書を池に放り込んだ。

「さあ、いよいよ、これからクライマックスシーンの始まりだ。」

最後の最後で、番組スタッフが現れ、ヒロインとなった女性アイドルと仲良く記念撮影、というのが、大筋の流れで、

その脚本に納得し、堂々と暴漢を演じ切ろうと張り切る満男であった。

午後10時を回った遅い時刻に、満男は、彼をいぶかる管理人の前を素早く通り過ぎ、彼女の部屋の前までやってきた。

鍵は開いているはずだった。

しかし、鍵は開いていなかった。

ただ、開いていなかった場合の対処についても、指示書には書いてあった。

彼女の部屋からは見えづらいフロアの角で彼女の帰るのを待ち、彼女がカギを開けた瞬間に、彼女に襲い掛かり、部屋に入り込み、彼女を抑え込む、というものだった。

この場合の台本としては、彼女が大きな叫び声をあげ、その声に駆け付けた人たちによって、彼女は助け出され、犯人役の満男は、あっけなく捕まってしまう、というものだった。

その場合、警察の協力を得て、尋問までをレポートするというので、

犯人役の満男は、彼女の熱狂的ファンであり、それが高じてストーカーとなり、今回の行為に至ってしまった、という流れで演じるように、という指示だった。

そして、切りのいいところで、警察官がネタ晴らしをし、このような犯罪が実際に起こらないことを願います、といったコメントを出し、

彼に協力を謝意し、無事に解放され、その後、彼女との後日談としての対談に出る、という結末のはずだったのだが、。。

彼が起こした事件は、翌日の新聞に大きく掲載され、犯人（役？）の満男についても、詳しく掲載されてあった。

そこには、犯人（役？）の満男が、不思議な陳述をしているが、おそらく、それも、ファンとしての妄想の一種であり、

ストーカー犯罪の新たな一面として、一部の評論家が解説するにとどまっていた。

さて、彼を操った本当の犯人はどこにいるのか。

あなたも、どうか、見知らぬ招待状にはお気を付けください。